



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.95

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2017年8月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://wjf4464.la.coccan.jp/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

新シリーズ・ジャズ講座第1回、初のジャズレコード録音から100年!

「ラグタイムからJASS誕生まで」

7月1日、お茶の水・アテネフランセ文化センターで開催

今からちょうど100年前の1917年は、ジャズの歴史にとって画期的な年となった。ニューオーリンズの白人5人からなるジャズバンド、**オリジナル・デキシーランド“ジャズ”バンド(ODJB)**が初めてジャズレコードを吹き込んだ年。これが大ヒットしてジャズは瞬間に全米、全世界に広がっていき、“ジャズエイジ”の幕開けとなる。これを受けて日本ルイ・アームストロング協会(WJF)では、新たにジャズ歴史シリーズ講座を催すことになった。その第1回例会(通算第61回)、初ジャズレコード100年記念「ラグタイムからJASS誕生まで」が7月1日、お茶の水・アテネフランセ文化センターに満席のお客様を迎えて開催され、最高の盛り上がりを見せた。

(小泉良夫)



ODJB(写真左下)のジャズレコード初録音を記念して開催されたWJF第61回例会。会場は熱心なお客様で埋め尽くされた(同右下)。出演は(左から)アレクセイ・ルミヤンツェフ(p)、外山恵子(p,bj)、粉川忠範(tb)、木村“おうじ”純士(ds)、外山喜雄(tp,vo)、広津誠(cl)、藤崎羊一(b)、関泰子(vl)の皆さん。
(写真撮影は、相馬威宣、小泉良夫)

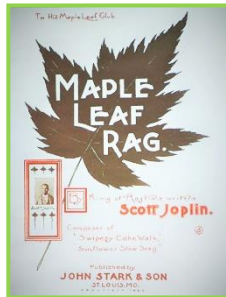
ラグタイムの創始者、スコット・ジョプリンの特集で幕あけ 晴姿の外山夫妻も結婚式で連弾、会場で再現！ 大ヒットした「メイプル・リーフ」&「ジ・エンターテイナー」



午後2時、山口義憲さん(会報「ワンダフルワールド通信」編集長、写真左)の司会で幕あけ。第1部では、『ジャズの元』となった1900年初頭の優雅な音楽、ラグタイムをたっぷり特集。そして第2部では、伝説のバディー・ボールドン、フレディー・ケパード、キング・ジョー・オリバー、そしてサッチモへと続くジャズの伝統と、そうした黒人パイオニア達が、どの様に初のジャズレコード誕生やジャズの発展に貢献したかを特集した。

普及に一役買った自動ピアノの動画も 背面スクリーンに次々と画像・映像も

第1部は、ラグタイムの創始者、スコット・ジョプリン(1868年、明治元年！テキサス生まれ)の特集で始まった。1899年、ジョプリンの作曲で大ヒットしラグタイムブームを引き起こした「メイプルリーフ・ラグ」と、1973年アカデミー賞受賞映画「スティング」で使われすっかり有名になった「ジ・エンター



テイナー」が、まず動画の映像で紹介され、ラグタイムの普及に一役買った自動ピアノの動画も登場。外山夫妻も学生時代、このラグタイムの魅力に執



りつかれ、2人で右手左手を担当し連弾、愛の芽生える引き金に！事実、結婚式では振袖姿の恵子さんとともにラグを連弾(写真右上)。そんな夫妻の写真が、まずステージ背

面の壁に大きく映し出された。「今でも忘れていませんよ！」とステージでもお2人がこの場

面を再現して見せる。昨年は金婚式を迎えたご夫妻、のっけから「ご馳走さま！」。

『ジャズの元』、ラグタイム音楽はピアノのみならず楽団用の編曲も普及し、ニューオリンズではこのラグタイムバンドに黒人独特のリズム感覚

などが加わってJASSの誕生につながっていく。この例会では、この日演奏された曲目のジャケット、演奏バンド、譜面、関連映像・写真などが次々と映し出され、目と耳を同時に楽しませてくれていた。

ラグタイム・ピアノのスペシャリスト アレクセイ・ルミヤンツェフさん登場

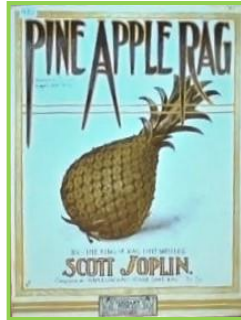


「今日のラグタイム特集のピッタリのスペシャリストが日本に住んでいるんです！」と、ラグタイムのゲストがステージに呼ばれた。ロシア・サンクトペテルブルク生まれで日本在住のラグタイム・ピ

アニスト、アレクセイ・ルミヤンツェフさん(写真上)。ドイツ文部大臣、ロシア政府の支援に加

え、ヨーロッパの大企業から数々の奨学金を獲得、モスクワ音楽院やケルン芸術大学で音楽を修学するなど国境を越えて活躍し、2003年の来日以来、日本で演奏活動を続けている。私たちスタッフが会場に到着した午前11時過ぎには、すでにステージのピアノについて繰り返し、繰り返し演奏をチェックしていた。

外山さんが彼に生まれや、日本在住など伺い、「あの長いラグタイムを何曲ぐらい演奏されるんですか？」と聞くと、これも流ちょうな日本語で「沢山です！」。そして、ジョプリンの「パイナップル・ラグ」で華麗なタッチのピアノソロを聴かせてくれた。



クレオールの人々のバンド演奏を聴き黒人が強烈なリズムでジャズ化する

続いて2曲目からは、バンド編成で演奏されるラグタイム音楽。外山夫妻がニューオリンズで5年間の武者修行中、昔ニューオリンズの楽団がやっていたラグタイムの貴重な譜面を手に入れることができた。フランス人との

混血で教養もあり、譜面も読めたクレオールの人々のバンド、ジョン・ロビショー・オーケストラが実際に使っていた譜面で、チューレン大学のジャズ資料室に保存されていた。ステージ背面のスクリーンには1910年ごろの

クレオール、ジョン・ロビショー楽団の写真が映し出される。クレオールの人々の演奏を聞

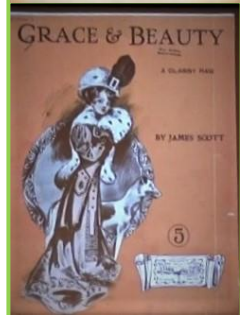
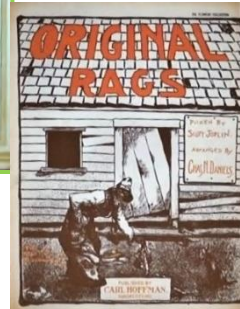


いて、譜面が読めないが強烈なリズムでめっぽうスウィングし、ブルージーな感覚の、真っ黒でアフリカ色が濃い黒人が、耳で聞き覚えて、ある意味「適当に…」演奏したことからラグタイムがジャズ化していった。

ラグタイムバンド・バイオリン第一人者関泰子さんも加わり華麗な演奏が続く

先にラグタイムを演奏したアレクセイ・ルミヤンツェフ(p)、WJFの例会に何度も出演されているの関泰子(vl)、外山喜雄(tp,vo)・恵子((bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、ニューオリンズラスカルズのドラマー、木村陽一を父に持つ若手の木村“おうじ”純士(ds)のみなさんがステージに入る。

演奏はスコット・ジョプリン1899年のバンドバージョン「オリジナル・ラグス」、クレオール美人にちなんだ「クレオール・ベルズ」。背後のスクリーンには、黒い肌のキュー



トなクレオール美人の写真(左、外山喜雄撮影)が映し出される。

そして再び、アレクセイのピアノをフィーチャーしたコーナー。ジョプリンと並ぶ黒人ラグ

タイム・スター、ジェームス・スコットの「グレイス&ビューティー」の華麗な演奏が流れる。

ラグタイムの時代からジャズの時代…いつの

時代にもこうした音楽は、踊りがつきもの。ここで外山夫妻が、今日のお客様に大サービス。皆さんに楽しんでいただき、笑いも取れば、とユーチューブを見て必死で研究したラグタイムダンスを披露。アレクセイさんのピアノをバックに、1900年当時のケイクウォーク、ワンステップ、ツーステップを披露

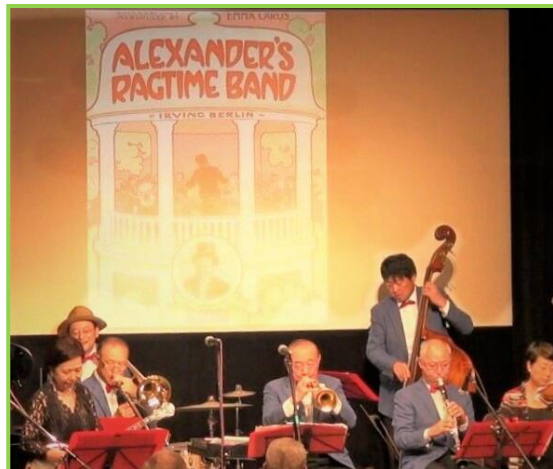
して通路を往復。オシドリ夫妻そのもの。ラグタイムもジャズもダンス音楽なんですね。第46回アカデミー賞作品賞、音楽賞などを総なめにした1973年のアメリカ映画「スティング」の有名な「ジ・エンターテイナー」。オリジナルの楽譜にはちゃんと「ラグタイム・ツーステップ」と書いてあるんですね！ スティングで使われたスローなラグタイム、「ソラース」とのメドレーに会場がうっとり聞き惚れた。

次いでレコード協会会長など要職を歴任された日本ジャズ音楽協会理事長によるラグタイムと当時の音楽ビジネスについての興味深いお話が入る(8面に別稿)。そのお話の中でも紹介された「アレキサンダー・ラグタイム・バンド」の演奏。この曲は、あのあまりにも有名な、アメリカを代表する作

曲家、アービング・バーリン(ホワイトクリスマス、イースター・パレード、ブルースカイ、ショーほど素敵な商売はない、などが有名)の初のヒット作。外山喜雄のボーカルがアル・ジョルソン風に！さらにデクシーランドジャズの有名な曲で、ジャズバンドのクラリネットのオーデイションに使われていた「ハイ・ソサイティー」の演奏に入る。この



の曲、昔のマーチのピッコロパートを手書きでクラリネットに書き直した譜面を外山さんが発見！ その手書きパートを広津さんが見事に再現。これにバイオリンも入ったオリジナルな形の「ハイ・ソサイティー」の優雅な演奏が続き、最後のコーラスになると、譜面の読めないアフリカの血が濃い黒人たちがやった「聞き覚え」の



ラフなジャズコーラスを想像した演奏を再現し、満席の客席の大拍手の中、第1部「ジャズを生んだラグタイムの世界！」を終えて休憩に入った。

@

**ドでかいラッパを備えた巨大蓄音機
100年前のSPレコード再生
タイムスリップして第2部がスタート**

**寺田繁さん所有ODJB「ワンステップ」
山本俊兵さんの秘蔵盤ホット5からも**

第2部がスタート。幕開けは、この日のハイライトの一つでもある、ドでかいホーンを備えた蓄音機による初のジャズレコード、ODJBによるSP盤「ワンステップ」の再生。録音は1917年2月26日、まさに2・26事件！ 一説には100万枚も売れたと

いい、その1枚がこの巨大なレア蓄音機(1932年頃のイギリスEMG製)の持ち主、寺田繁さん(SP復刻CDシリーズに尽力されているオーディオパーク社長の貴重なコレクションの一枚。この日会場にお目見えした。これも何かレコード100年の歴史物語のようだ。

さっそく寺田さんの手でSP盤がかけられた。

「後ろまで聞こえていましたか？」と心配そうに尋ねていらした寺田さんだったが、ばっちり！ 一番後ろの席にも十分な音量で伝わってきていた。なかなかの迫力。シーンとして聞き入る会場の皆さん。会員でSPレコードコレクター、山本俊兵さんの秘蔵盤、サッチモのホット5から「ダークタウン・ストラップターズボール」や「ワンス・イン・ア・ホワイ尔」も流される。



寺田繁さん(手前左)とドでかいラッパを備えたレアな巨大蓄音機



この日の寺田さんのコメントの中で「えっ!!」と驚かされたことがあった。それは、この巨大ホーンが紙製品だということ。「ロンドンの電話帳を溶かして作ってあるんです」と。なるほど、きっと金属製のラッパより柔らかく再生されているのだろう。お手伝いに来てくれてい

た早稲田ニューオールリズジャズクラブの学生さんが丁寧にセットしたり、片づけたりしていたが、この取り扱いには本当に神経を使いますね。

遠方からのお客様、岡崎市にある膨大なジャズレコードコレクション、内田修コレクション担当の三浦健仁さん(写真左下)が、1950

年に日本コロムビアから初めて発売された12枚組のSPレコードについてお話になった。ジャズドクター故内田修さんの最初のコレクションでホットクラブジャパンが制作担当に当たった1917年から1947年までのジャズ

の歴史。アメリカに先駆けてこのようなアルバムが日本で作られたことはまさに驚異。このSPアルバム

の最初の曲がODJBだったという。

佐藤修さんが再びステージに上がり、ジャズレコード100年に寄せて、ジャズがポピュラーとして発展していった経緯など分かりやすく詳細に説明された(これも8面に別稿)。ま

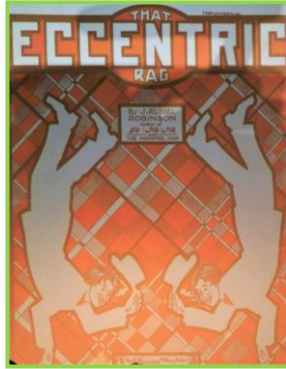


ビクター・トーキングマシンのポスターを手に話される佐藤修さん(このポスターは会場の一人にプレゼントされた)

だまだお話されたいことがたくさんあるそうですが、シリーズ第2、第3回到…。

JASS、ODJBを生で再現…JAZZへ天オリイ・アームストロングへの軌跡

さあ、演奏に入りましょう！ JASS、ODJBの演奏を生で再現してもらおう企画で、100年前の演奏から「馬小屋のブルース」と「タイガーラグ」。次いで黒人最初のジャズレコードとなった1922年録音の



キッド・オーリーのバンドによる「オーリーズ・クレオール・トロンボーン」。さらにバディー・ボールデン(初代ジャズ王)、フレディー・ケパード、キング・ジョー・オリバーといったニューオリンズの先駆者たちの演奏も再現された。外山さんが当時の古い楽器を取り出して演奏、彩を加える。「こういうパイオニアたちのスウィング感、ジャズ感覚が天オリイ・アームストロングに伝

わっていくんですね」と山口さん。

そこでサッチモの初録音となった「チャイムス・ブルース」、そして

ラグタイムの楽しい曲「エキセントリック・ラグ」

が演奏される。

この第2部では、1部ですとバンジョーを演奏していた恵子さんはピアノに専念、アレクセイさんは聞き役に回っていたが、ここで再びステージへ。彼の演奏の素晴らしさは、会場で売られていたCDの売れ行きにも、十分反映されていたようです。曲は「11番街～12番街のラグ」。なんと11番街もあつたんですね。

大喝采の中、最も古い曲でフィナーレ 第2,3回シリーズもお早めによろしく

フィナーレは最も古い1897年の「アット・ア・ジョージア・キャンプ・ミーティング」(写真左)。



大喝采の中、外山さん、恵子さん、広津さん、粉川さんが会場を巡る(写真真下中央)。午後4時半終演の予定が5時近くになってなっていました。

出演者の皆さんお疲れ様！そして、ご来場の皆様、本当にありがと

うございます。第2回、3回シリーズもよろしく願いいたします。そう、さっそく予約をされ



ていった方もありました。今回第1回は満員札止めでしたからね。でも、立ち見でいいから入れてほしいといった方も

ありました。お早目のご予約を！

シリーズ第1回例会のプログラムで紹介された ラグタイムからJAZZへの“歴史物語” (再録)

ラグタイムのリズムと共に幕が開いた 20世紀!

1890年代、黒人のリズムを持ったメロディー、クーンソングとかケイクウォークが流行し始めます。黒人の跳ねるようなリズム、シンコペーションの多いメロディーは、ピアノ音楽としても大流行します。

きっかけはテキサスに生まれセントルイスを中心に活躍した黒人ピアニスト、スコット・ジョブリン。1899年メイプルリーフ・ラグが大ヒットし、次々とラグタイムの譜面が出版され世はラグタイム全盛時代に突入。

同時に、バンド用の編曲も多数販売され、アメリカ中の公園はラグタイムやラグ調のポピュラーソングであふれました。

黒人的な音楽や黒っぽいダンスに対するあこがれは、1850年代のフォスターのメロディーの流行にもその兆しが!

ラグタイムのラグとは、ぼろきれ、クズ、ごみと言った意味。黒人的な音楽への少しの軽蔑や嘲笑を込めて、ラグのリズムをボロ・リズムとかクズ・リズムとか表現したのかもしれませんが。でも、そこには楽天的で人の良い黒人に対する白人の愛情をも感じることが出来ます。白人社会は差別し軽蔑もしていたにもかかわらず、黒人たちに魅かれる何かを感じていたのです。

アフリカ的な黒人達が聞き覚えでラグ タイムをジャズ化!

ラグのブームで全米各地でラグタイムバンドが演奏。でも、ニューオリンズはちょっと違った事情がありました。黒人だがフランスやスペイン人の血を引く混血クレオールの人々と、真っ黒いアフリカの感覚丸出しの人たちが隣り合って住んでいたのです。アフリカ的な黒人の人たちは全く譜面が読めず、耳で覚えてアフリカ的な強烈なリズムでラグタイムやマーチを演奏したことで、まったく新しいアメリカ音楽ジャズのがんがみを感じました。

初代ジャズ王、バディー・ボールドン

1900年頃、始めてジャズらしい演奏をしたのが伝説のコルネット奏者バディー・ボールドン。初代ジャズ王と呼ばれました。1907年に発狂し録音は残っていませんが、当時のラグ・タイムメロディーをジャズ的に演奏、当時の子供たちまで、ファンキーバット(くさいお尻)、ファンキーバット、あっちへ行け(Funky But, Funky But, Take it away...)と口ずさんでいたと言います。

モダンジャズで有名になったファンキー、、、1900年にもジャズはファンキー!!

そうです! アート・ブレイキーのジャズ・メッセンジャーズのヒットで有名になったファンキージャズ、、、1900年、ジャズの創始者ボールドンの音楽も、ファンキーだったのです! ジャズの元となったラグタイムのラグは、ボロ、クズ、ごみ。ファンキーと通じるところがありますね。

思えばフォスターに始まり、1950年代のファンキーブームまで、、、黒人的なファンキーで、スインギーで、ちょっとダーティーなものに、アメリカも世界も憧れ、その憧れは現代も続いているのかもしれない!!!

ニューオリンズで起きた音楽の化学反応!!

バディー・ボールドンの登場で、音楽の化学反応のような現象が起きたのが1900年から1915年頃のニューオリンズ。ニューオリンズの黒人たちの影響で、ジャズ的スウィング感を持つようになったラグタイムは、ボールドンにつづくジャズのパイオニア達、フレディー・ケパード、キング・ジョー・オリバー達へ受け継がれ、黒人の音楽にヒントを得た白人バンドODJBが初ジャズレコードをヒットさせ、1920年代、天オレイ・アームストロングの活躍でついに完成された形となり、世界へ爆発的な普及と広がりを見せるようになったのです。

第1部(4面)、2部(5面)の佐藤修さんのユニークなお話から～

まず私は単なるジャズ・ファンで、研究者でもなければ、評論家でもないのです、これからお話することは私の思い込みだとご理解ください。

今年はジャズレコード発売100年、「WHAT A WONDERFUL」50年、そして、黒人大リーガー、ジャッキー・ロビンソンの大リーグ・デビュー僅か70年です。

この最初にジャズを録音した白人バンドが「ORIGINAL DIXIELAND JASS BAND」なのです。JASSという言葉はシカゴの暗黒街の俗語で、わいせつな意味だそうです。そしてJAZZという言葉の本来の意味は、淫売屋で女たちが使う最も卑猥な隠語だそうです。これらの言葉がJAZZ音楽に使われ始めたのが1915年です。ここからそれまで使われていたBRASS BANDからJASS BAND、JAZZ BANDという概念がでてきました。

なぜ白人がJazzの最初の吹き込みとなったのか？

黒人が真似されるのを嫌がったという説もありますが、黒人のレコード吹き込みまでそれからどうして5年もかかったのでしょうか？当時、世の中にレコード店はありませんでした。レコードは家具店が蓄音器を売るために蓄音器にレコードを景品のように付けていたそうです。蓄音器会社がレコードを出していたのです。蓄音器会社が黒人のレコードを出したら、家具店がその商品を扱ってくれな

くなる恐れがあって、黒人のレコードを出せなかったのです。

ちなみにColumbiaとRCA以外の社は、この2社が結託していたので、レコードを出さなかったそうです。後にGennetが公取に訴えて他社も出せるようになりました。

なぜJazzがポピュラーになったのでしょうか？

ここにArmstrongの存在があります。彼の音楽的な才能はもちろんですが、それだけでなく彼のキャラクターが大きな力でした。プレスリーがいたからRockが大きな広がりを作れた様にSatchmoがJazzのシンボルとしてJazzをポピュラーなものにしました。八木節がなぜ日本中に広まったのでしょうか？九州で歌っていた堀込源太を見た浅草の興行師が商売になるとみて浅草に連れてきて

歌わせたのです。地元で歌うのと違って東京の客に受けるように歌い方も変えたそうです。

ストーリービルが1917年に閉鎖された時、多くのミュージシャンはニューオーリンズに残りました。ミュージシャンといっても丁度日本の村祭りでお囃子をするように、演奏で食べていけたのではなかったのでしょうか。葬式に演奏する人は他所に行ってJazzを演奏して食べていけるとは考えられなかったのではないのでしょうか？それが証拠にニューオーリンズ・リバイバルがおきた40年代、ウィリアム・ラッセルがニューオーリンズに行きジョー



ジ・ルイスやジム・ロビンソンを探すのに苦労したそうです。

シカゴの興行師や密造酒を飲ませる店が目をつけたミュージシャンがシカゴへ行けたのではないのでしょうか？ シカゴやニューヨークに行ったミュージシャンは、客の白人に受けようとしていました。これで Jazz が白人に広まってポピュラーになったのです。

Armstrongも客に受ける事を大事に考えたのです。彼は DECCA に移籍しました。DECCA はいい Jazz を作ろうとは考えていなかったのではないのでしょうか？ 丁度日本のレコード会社が Jazz を歌っていたフランク永井やペギー葉山に歌謡曲を歌わしてヒットさせたように。

ただ Satchmo がすごいのはラテン、シャンソン、ハワイアン、ヒット曲…何をやろうが全て彼の音楽にしてしまったことです。そしてここで彼がやった事が一挙に Jazz をポピュラーなものにしました。

ジャズの歴史や発展を音楽ビジネスという観点から観察すると

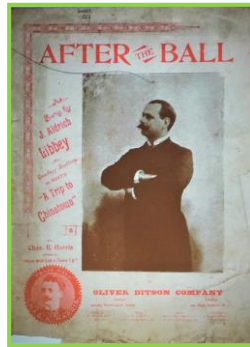
黒人的メロディーや踊りの流行について往年のジャズ評論家、野川香文さんは、「アフリカから奴隷として移入されたアフリカのニグロは、故国からの遺産として持ってきたものは何もないと言われていたけれど、はしなくも音楽に対する鋭敏で特異な感覚が、遺産というべくあまりにも大きなものであったことが証明されることとなった。それはまず、彼らのリズム的な感覚として証明されることとなった。…アメリカに来て、様々な旋律を吸収…白人

の讚美歌や欧州の民謡…黒人達の得意なリズム処理の魔法にかかって特殊なものとなった」と書かれていました。

1800年頃から、こうした黒人的な音楽が白人の minstrel show で人気となります。顔を黒く塗って、黒人のちょっとおバカな言動をまね、踊り、歌を取り上げたコミックなミュージカルショー。この時代に活躍した大作曲家の一人、スティーブン・フォスターの1851

年の「故郷の人々 (スワニー河)」はあまりにも有名です。

1890年代頃になると、こうしたメロディーの楽譜を出版し売り上げで利益を売るようになります。1892年の「ダンスが終わってから (After the ball is over)」(写真左)は500万部も売れたのです。



1899年に大ヒットした「メイプルリーフ・ラグ」を書いた黒人、スコット・ジョプリン(写真下)の登場で、アメリカ初のポピュラー音楽とも言われるラグタイムの大ブームを起こしました。

このブームの理由の一つが、自動ピアノの



普及と、楽譜出版ビジネスの台頭ではないかと思えます。ジョン・スタークという白人楽譜出版社の力が大きかった。スターク&サンズは、その後の

ティンパン・アレイが隆盛になるころには、ラグタイム・ブームの終わりと共に、消滅して行きます。

1914年には、ブルースブームが起こります。これも、楽譜出版で大きな利益をもたらしました。楽譜を売る店の前で、ピアノや歌の実演をしたプラグガーと呼ばれるミュージシャンもいました。ジョージ・ガーシュインも、そんなプラグガーとしてスタートしました。

自分たちが歌ったり、演奏したりする以外で音楽を商売にした最初の物はミュージック・ボックス(オルゴール)です。はじめはスイスのシリンダー式、次にドイツのディスク式。

これらはレコードが出てきて吹き飛びました。並んで音楽出版です。実は演奏家より収入が多かった様です。みんながなんとなく歌っていた民謡などを登録することも、少なからずあったようです。ジェリー・ロール・モートンは、W.C.ハンディーを他人の曲を勝手に登録しただけと怒っていたそうです。テクノロジーの発展は音楽の普及に大きく貢献しますがピアノ・ロールもその一つです。

初めての知人2人「座学になった」 ニューオリOB「鳥肌が立った」 ——例会感想 山口義憲

7月1日(土)、御茶ノ水アテネフランセでの例会終了直後、早稲田大学ニューオルリンズジャズクラブの

OBで、今もトランペットを演奏している東条一幸さんが私のところに近寄って来て、「山ちゃん、今日の演奏よかったねえ！特にキッド・トーマスがバディ・ボー

ルデンの演奏スタイルを受け継いでいたという外山先輩の説明と当時のラップで、キッド・トーマスのフレーズを外山さんが吹いたとき(写真上)、鳥肌がたったよ。50年間、ニューオリンズジャズをやってきて、キッド・トーマスもジョージ・ルイスのバンドでのものを聴いてはいたけれど、外山さんの演奏を聴いて目



からウロコの思いをしたよ」と興奮さめやらぬ面持ちでした。

例会に参加してくれた、ジャズにはあまり詳しくないという知人2人と夕刻の「神田まつや」へ繰り込み、ビールと日本酒と正しい蕎麦屋のつまみ、いたわさなどで歓談しました。ふたりは異口同音に「初めて聞く100年前の

ジャズマンの名前ばかりだったけれど、ラグタイムの演奏がジャズのリズムに変わるところなど、楽しく、座学にもなりました。

また、外山夫

妻のニューオリンズ武者修行時代の話も興味深く、ダンスのステップの実演紹介でジャズは踊るものだ！と実感しました。しかしアレクセイさんのピアノも見事なものでした。9月の会には家内と一緒に参加したいです

ニューオリンズジャズに詳しい人も、そうでない人も楽しめた素晴らしい例会でした。

サッチモのこの素晴らしき世界 録音から50年！

8月5日(土) WJF例会で超レア・サッチモ映像集を上映

この素晴らしき世界・・・何と素敵な響きの言葉 作詞作曲者、サッチモに歌わせた両者に脱帽

この素晴らしき世界・・・何と素敵な響きのする言葉だろう。特にこの戦争とテロが身近な時代には、なおさら心にしみる。英語の持つ響きも素晴らしい・・・ワット・ア・ワンダフルワールド！！ありふれた言葉のようで、よく考えるとこの上なく素晴らしい深い意味をふくんでいる。シンプル・イズ・ベスト・・・単純明快、簡単明瞭こそ最高。こんなテーマでこのような最高の曲を作詞作曲した作者、ジョージ・D・ワイスは最高だ！！そして、サッチモにこの曲をうたわせようと考えた名レコード・プロデューサー、ボブ・シール（ボブ・シールは、ジョージ・ダグラスのペンネームで、作曲者にも名を連ねている）の感覚に脱帽。

10年ほど前、ロックの大スター、ロッド・スチュアートがスタンダードを歌った企画がヒット、アメリカで注目を集めた。ワンダフルワールドの入ったアルバムはヒットチャートNo.1となった。スティービー・ワンダーのハーモニカの伴奏も素晴らしく、サッチモとは違った、ギャルウケのする雰囲気の中のロッドの歌い方・・・でもやっぱり、ロッドには悪いがルイ・アームストロングが歌ったあのバージョンには遠く及ばない。

“人生の苦しみと”いう授業料を払ったサッチモ そうでなければよいジャズも音楽もできないんだ

「サッチモのワンダフルワールド！！ どうしてサッチモの音楽は良いんでしょう？」

名ドラマー、ジミー・スミスさんに聞いてみたことがある。カウント・ベイシー、エラ、サラ、エロルガーナーと活躍したジミーさんとは8年間、東京ディズニーランドのニューオリンズ広場で共演させてもらい、いつも楽屋でこんな話を聞かせてもらっていたのだ。

「いいかいタヤ〜マ（ジミーさんは私の名前はトヤマじゃなくて、タヤマだと思っている）、“授業料”を払わなければ、良いジャズも音楽も出来ないんだよ。“人生の苦しみ”と言う授業料を払わなければネ・・・」黒人として人種差別を体験してきたジミーさんの言葉だけに、胸を打つものがある。

バトルフィールド“戦場”と呼ばれるほど犯罪と暴力に溢れ

たニューオリンズのスラムに生まれ、11歳で少年院に入所。そこでトランペットを教わったサッチモ。その声は少年時代から石炭売りや廃品回収、新聞売りをやって鍛えられた声・・・。確かにサッチモの払った“授業料”は十分すぎるほどだ。サッチモほど“この素晴らしき世界”を歌うにふさわしいアーティストは、いないのかも知れない。

提示された録音料金はLP1枚分の500ドル！ マネージャーは「2万5000ドルいただきます」

サッチモのあまりにも有名なワンダフルワールド。意外なことにレコーディングされた時は、こんなヒットになるとは全く思われていなかったと言う。記者ローレンス・ベルグリーンが書

いた本“ルイ・アームストロング―その驚くべき一生”の中に、こんな話が載っていた。

「この曲をサッチモに持ってきたのは、かつてサッチモ／エリントンの名アルバムをつくったボブ・シールで、当時はABCレコードのプロデューサーだった。サッチモはすっかりこの曲が気に入り、ストリングスや管楽器で楽団編成が大きくなり予算がないと言うことで、音楽家組合が取り決めた最低の録音レート250

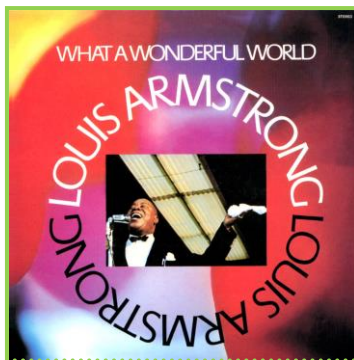
ドルでレコーディングをOKする、と言うほどの惚れ込みようだった。ところが、ABCの社長のラリー・ニュートンは、サッチモもこの曲もプロデューサーのシールも大嫌いだった。政権によるベトナム戦争への“忖度”もあったのかもしれない。そんな訳で発売当初、特別のプロモーションは一切されず、アメリカでの当初のセールスは1000枚にも満たなかったという。しかし、英国では、アットという間に60万枚を売る大ヒットとなっ

た。慌てたニュートン社長はワンダフルワールドのLPアルバムとして発売するため、追加の曲の録音をサッチモのマネージャーに依頼してきた。提示された録音料金はLP1枚分でタッタ500ドルだったそうで、ドコまでも締まった

社長である。マネージャー（ジョー・グレイザー）はニタツと笑って、2万5000ドル頂きます、と答えたという」

本格的な永遠のヒットとなったのは1987年 映画「グッドモーニング・ベトナム」に挿入で

この曲がアメリカで改めて、『本格的な永遠のヒット』となったのは、20年以上経った1987年、映画グッドモーニング・ベトナムに挿入されてからである。（外山喜雄）



ABCレコードのLPから



サッチモ on 映像——映画スターとしての活躍も群を抜いている

初登場は1932ベティーちゃんの漫画映画にアニメと実写で
ルイ・アームストロングこそミスター・ジャズの呼び名がふさわしい

ジャズレコード100年。サッチモはODJBの初ジャズレコードの6年後、1923年にキング・オリバー楽団と初録音している。以来、天国に召されるまでのほぼ50年間、数々のヒットを残してきた。さらに没後15年にも「この素晴らしき世界」が世界的ヒットを記録。サッチモの代名詞ともなった「聖者の行進」と並んで、きっと500年後にも人々に愛されていることだろう。同時に、1920年代、若き日のサッチモが作り上げた斬新なジャズ感覚とテクニクは、現代のジャズにまでその影響を及ぼしている。

ニューヨーク市クイーンズ区コロナの自宅へ ミスター・サッチモ、USA…で郵便が届いた

サッチモの活躍は「音」だけではない。エンターテイナー、映画スターとしての活躍も群を抜いている。こんな話がある。サッチモが生前住んだ家が、ニューヨークのクイーンズ区コロナにあり、現在サッチモハウス博物館(LAHM=the Louis Armstrong House Museum)として公開されている。その家で、外国からの郵便が見つかったという。あて名は、ミスター・サッチモ、USA。これだけで郵便が届く人は、大統領とサッチモだけかもしれない。

サッチモが映画に初登場するのは1932年、ベティーちゃんの漫画映画(写真右上)にアニメと実写で登場。同年、もう1本実写の「黒と茶の幻想」もある。黒人のある意味笑の種にしたミュージカル・コメディで、サッチモは、いわゆる

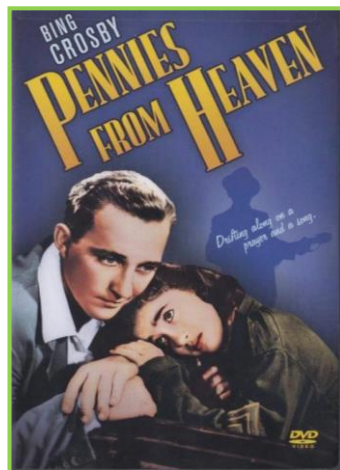
「アフリカ土人」扱いで登場する(写真上)。でもそんなシチュエーションも目いっぱい楽しみ、目の覚めるような、



モダンジャズの若手プレイヤーを思わせる斬新なプレイをさく裂させ、そこにすでに「ハロー・ドーリー！」で世界の人気者になった「スター」の存在を見ることが出来る。

1936年大スタービング・クロスビーと共演 メジャー・デビューし毎年映画出演が続く

1936年には、映画の都ハリウッドに呼ばれ、映画「ペニーズ・フロム・ヘブン」(写真下)で大スターのビング・クロスビーと共演、正にメジャー・デビューを果たしている。そ



の後ほぼ毎年映画出演は続き、すでに1938年映画「ゴーイング・プレイセス」で歌った『ジーパス・クリーパス』はアカデミー賞候補の曲に。黒人差別の多かった時代、しかも1930年代には大変なことだと思う。さらに、1956年にも、サッチモが

大きな役割を果たした映画「上流社会」もアカデミー賞にノミネートされ、1969年には「ハロー・ドーリー！」が3部門受賞。日本の私達にもなじみの深いサッチモがらみの映画は、「グレン・ミラー物語」、「五つの銅貨」が忘れられない。他にも、「パリの旅愁」、「真夏の夜のジャズ」、「サッチモは世界を廻る」と数えきれない。映画の主題歌も歌っている。あまり知られていないが『女王陛下の007』の主題歌「We Have All The Time In The World」は、いわば知られざるサッチモのヒットである。

1950年代のテレビ時代には多くの番組に出演 みなを泣かせた「時には母のない子のように」

日本では「銀幕」の中で会うことが出来たサッチモ。しかしアメリカでは1950年代のテレビ時代、サッチモは多くの番組に出演、近年さまざまな珍しい映像が発掘されている。テレビで元旦と言えば、かつて日本でも大スター達が華やかに顔見世音楽に満ちていた時代があったが、アメリカもそうだったようで、初期の映像では1952年

1月1日フランク・シナトラのショーにサッチモがゲスト出演した。1960年にも、NBCテレビで人気だった、電話機の「ベル・テレフォン・アワー」



に1月1日に出演し、10分近くの「サッチモ・コーナー」が放映されている。サッチモは、お正月顔見世スターだったのだ！

この放送ではこんな話が伝わっている。「明るい表通りで」、「レイジーリバー」、「時には母のない子のように」、「マスカラット・ランブル」と続くメドレー。この中で特に、「母のない子のように」の演奏は、黒人として子供時代から苦労を重ねてきたサッチモの人生がそのまま移されたような演奏で、演奏が終わった時には、ディレクターも、カメラマンも、大道具さんも、その場にいたすべての人たちが泣いていたという。

**亡くなる直前でもサッチモ精神は健在だった
最後に歌った曲で「皆さん、本当にありがとう」**

サッチモが他界したのは1971年7月6日。病気がちで入退院を繰り返し、体調がすぐれない中でも常にサッチモ精神は健在だった。亡くなるほんの5ヵ月前の1971年2月10日、旧友ビング・クロスビーと、英国出身のキャスター、デビッド・



フロストのショーに出演したサッチモの貴重な姿が残されている。この番組の最後にサッチモが歌った曲

「ニューオーリンズから来た少年=A Boy From New Orleans」が心を打つ。曲は「聖者の行進」の曲に、サッチモの少年時代からの想いを詩にのせて、



ビング・クロスビーとサッチモは1936年に初共演して以来、1956年「上流社会」他多くの映画で絶妙な掛け合いを見せた。亡くなる数ヵ月前にもテレビショーで共演。



回想しながら歌ったもので、最後は、オーロード…神様、呼びかけながら、こう結んでいる。

そう、最後にみなさん
私のはるばる来た道は、
ほんとうにすばらしく、
楽しいことばかりだった。
神さま、心から感謝します。
そして、皆さん、本当にありがとう。
皆さんは、この“サッチモ爺さん”にととても親切でした。
この年をとった、ニューオーリンズ生まれの
‘グッド・ルッキングな少年’にね！

この放送の後3月にNYのホテルに出演、しかし1971年4月には心臓のトラブルと体調悪化で入院、7月に始めに退院し71歳の誕生日(当時7月4日とされていた)を迎えテレビのインタビューにも答え、歌ったという。担当ド



Swing Journal 1979年1月号から

は、サッチモの遺言ともいえる貴重な記録である。

8月5日、サッチモの「この素晴らしき世界」録音から50年。次回の第2回例会、サッチモの超レア映像集では、こうしたテレビ時代の知られざるサッチモの映像を、皆様に沢山見ていただこうと思っています！

クターに電話をし、翌日からリハーサルを始めたと言っていた翌日7月6日の朝、世界を愛し、世界に愛された69歳の偉大な生涯を終えた。

サッチモが歌った「ニューオーリンズから来た少年」

——私の1曲

サッチモの珠玉の名盤

あなたの最も好きな一曲を挙げて下さい、と問われても、沢山あり過ぎて答えるのに窮してしまいが、どうしても、と言われると、恩師の牧田清志先生(ペンネーム牧芳雄)が、NHKラジオ番組の「リズム・アワー」のテーマ音楽として使っていた、クレフ・レコードの45回転盤に入っているフリップ・フリップス・セクステット「コットン・テイル」を挙げたい。

しかし、この盤は今日では入手不可能なので、ルイ・アームストロングが彼のホット・セブンで1927年5月10日に吹き込んだ「ポテト・ヘッド・ブルース」を挙げたい。ジャズでは同じ曲でも、演奏者はもちろん



私の一曲

ルイ・アームストロング ホット・ファイブとセブン 1925～1928

ホット・ファイブ結成90周年を記念して発売されたSP複製盤。7曲目に「ポテト・ヘッド・ブルース」が収録されている(CD: オーディオパーク、2015年発売)

あなたの最も好きな曲を一曲挙げて下さい、と問われても、沢山あり過ぎて答えるのに窮してしまいが、どうしても、と言われると、恩師の牧田清志先生(ペンネーム: 牧芳雄)が、NHKラジオ番組の「リズム・アワー」のテーマ音楽として使っていた、クレフ・レコードの45回転盤に入っているフリップ・フリップス・セクステットの「コットン・テイル」を挙げたい。

しかし、この盤は今日では入手不可能なので、ルイ・アームストロングが彼のホット・セブンで1927年5月10日に吹き込んだ「ポテト・ヘッド・ブルース」を挙げたい。ジャズでは、同じ曲でも、演奏者はもちろんのこと、吹き込んだ時や場所でも変わってくるので、必ずこれも指定しないと意味がない。

この演奏は、オーディオパークから発売されている「ルイ・アームストロング ホット・ファイブとセブン 1925～1928」をはじめ、いくつかのサッチモ(ルイ・アームストロングのニックネーム)の編集ものに収録されている。

私は高校生のとき、ジャズ愛好団体のホット・クラブ・オブ・ジャパンに入会し、そこで有名なジャズ評論家の河野隆次氏と知り合いになった。鶴沼にあった同氏のお宅に時々お邪魔していたが、そこで初めて「ポテト・ヘッド・ブルース」聴かせて頂いて、すっかりこの曲に惚れ込んでしまった。サッチモのソロはもとより、充実したリズム感、微妙な間の取り方と、すべての点でサッチモの最高傑作であると信じている。このOkehのSP盤を手に入れたときの喜びは未だに忘れられない。

オーディオパークから発売されているこのCDには、ほかに「ウェスト・エンド・ブルース」など、サッチモの名演が20曲収録されている。

中村 宏
防衛医科大学名誉教授

のこと吹き込んだ時や場所でも変わってくるので、必ずこれも指定しないと意味がない。

この演奏は、オーディオパークから発売されている「ルイ・アームストロング ホット・ファイブとセブン 1925～1928」をはじめ、いくつかのサッチモ(ルイ・アームストロングのニックネーム)の編集ものに収録されている。

私は高校生のとき、ジャズ愛好団体のホット・クラブ・オブ・ジャパンに入会し、そこで有名なジャズ評論家の河野隆次氏と知り合いになった。鶴沼にあった同氏のお宅に時々お邪魔していたが、そこで初めて「ポテト・ヘッド・ブルース」聴かせて

頂いて、すっかりこの曲に惚れ込んでしまった。サッチモのソロはもとより、充実したリズム感、微妙な間の取り方と、

すべての点でサッチモの最高傑作であると信じている。このOkehのSP盤を手に入れたときの喜びは未だに忘れられない。

オーディオパークから発売されているこのCDには、ほかに「ウェスト・エンド・ブルース」など、サッチモの名演が20曲収録されている。



ルイ・アームストロング ホット・ファイブとセブン 1925～1928
ホット・ファイブ結成90周年を記念して発売されたSP複製盤。7曲目に「ポテト・ヘッド・ブルース」が収録されている(CD: オーディオパーク、2015年発売)

ニューオーリンズにジャズの伝説を訪ねて① ジャズの故郷の「図書館の虫」になった頃

選挙運動に登場し新聞の1面を飾った黒人バンド

初代ジャズ王バディー・ボールデンの伝説や、ジャズメンの想い出話で語られる大古のニューオーリンズ。1968年からニューオーリンズで暮らした5年間、ジャズ誕生当時のことが知りたくて図書館の虫になっていた時期がある。昔の新聞や広告には神話の時代のバンドが登場した。ボールデンが演奏したと伝えられる公園の催しのピラや当時の譜面。さげすまれていた黒人が新聞の第1面に登場したと思ったら、黒人バンドを使った選挙応援に、『あつちは黒んぼのパドを雇った!!ははは』と、反対派が嘲笑する記事だったり…。

対立候補は嘲笑「黒人の助けを借りている」

1916年3月1日、ニューオーリンズ・アイテム紙の第1面に黒



人バンドの写真が登場した。バディー・プティ(コルネット)、ビッグ・アイ・ルイ・ネルソン(クラリネット)、チャイニー・フォスター(ドラム)などが写っている。黒人バンドが新聞に登場するのはこれが初めて。新聞の第一面は世界初かも！コルネットのバディー・プティは、サッチモも‘あいつは上手かった！’と褒めちぎる名手。ホット5で録音した「コルネット・チョプスイ」や、1963年にジョージ・ルイスと来日し

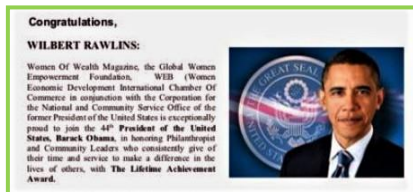
たパンチ・ミラーが似ていたという。1917年、白人グループが初のJASSレコードを吹き込む前の年、JASSが街中で人気だったことがうかがわれる。メンバーの中で、クラのビッグ・アイ・ルイ・ネルソンは1940年代アメリカン・ミュージックに、ドラムのチャイニー・フォスターも60年代にレコードを残している。この新聞と対立する新聞ペキューン紙の応援する候補が、選挙応援に流行りのジャズバンドを使

ったのだが、白人組織の応援に黒人なんか使いやがって…Negro aids of white organ's public demonstrations. ははは…と嘲笑した記事だった。 (外山喜雄)

ローリンズ先生、永年の社会貢献讃えられ バラク・オバマ特別功労賞受賞

ニューオーリンズの高校でバンド指導を続ける、名指導者ウィルバート・ローリンズ先生が、スラムの子供達の通う学校のバンド指導者としての永年の社会貢献を讃えられ、44代大統領バラク・オバマ・特別功労賞を受賞した。2017年の米国独立記念日7月4日に贈呈が行われ、ニューオーリンズ・ハイエット・ホテルでは祝賀パーティーが開催された。

私達は2003年、デザイナー・プロジェクト(貧民救済住宅)というスラムに住む少年たちが通う G.W.カーバー高校を指導していたローリンズ先生に初めてお会いし、39点の楽器を寄付した。この時、強烈なリズムの音楽を演奏する、先生の教え子、TBCブラスバンドにも出会った。「スラ



ムの子供達には、靴下も買えない子もいる。でも、そういう子供達が、本当に素晴らしい音楽をやるんです」。2メートルを超える背丈の先生に、1913年サッチモが少年院で出会った大恩人、ピーター・デイビス先生の姿がダブった。

不幸なことに2005年のハリケーン・カトリーナで学校も先生も被災、先生は失業して不幸な時期を過ごしました



オバマ大統領夫妻のパネルの前でポーズをとるローリンズ先生ご夫妻

が、2009年からはオーペリー・ウォーカー高校(後に統合でランドリー・ウォーカー高校)の指導者として活躍。日本から先生に届いた楽器は、150点を超える。東日本大震災では、いち早く日本支援の活動を開始、2012年には先生と子供たち被災地支援の来日が実現した。おめでとうございます。

(外山喜雄)

嬉しいお便り

ありがとうございます

十字屋ホールで、コンサートを企画担当して下さった、森泰義さんから

く雨の日に、外山喜雄とデキシーセインツを聴きにアテネフランセ文化センターへ。外山さんたちの演奏は、雨だからこそ聴きに行く。梅雨時の忌わしさを吹き飛ばすようなライブが味わえるから。今回は、ジャズのさらなる源流、ラグタイムや Jass と呼ばれた頃まで遡ってのライブ&レクチャーだ。ディキシーランド・ジャズ一本で、数十年も演奏されてきた。演奏に迷いが無い。恩着せがましくない。満員の聴衆も福々しい。誰もが屈託ない笑顔。初めての人にも分かり易い、ジャズに関する導入がある。ワンパターンどころか、色々な角度からディキシーを見つめ、トークや資料を交えながらのショー・ケース、実は最先端を往っている。自分も、やれダンモだ、フリーだと唱えた輩だが、結局は最後ここへ戻ってくる。いまは、黎明期を支えたジャズがたまらなく愛おしい。>

大丸リユニオン・ジャズメン)も、お知らせしたとおり、6月15日天国に召されました。

サッチモ祭のもう一方の貢献者、元サッポロビール社長の



岩間辰志さん(写真右)は、2015年11月16日に亡くなられております。

次号で、追悼記事を掲載したいと思います。(外山)



募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://wjf4464.la.coocan.jp/>

多大なご援助をいただいた方々が次々ご逝去ご冥福の祈り、次号で追悼記事を掲載します



先日、楽器代理店、(株)グローバルから連絡をいただき、福田道道さん(写真左、元社長、現在会長)のご逝去を知りました。

11日、葬儀に出席してきました。(7月8日ご逝去)

福田さんと、管楽器修理学院の生徒たちが、TDLを訪問(恒例となっ

ていました)、私達を撮った写真も、展示されていました。

また、サッチモ祭を1981年、一緒に開催、当初から並々ならぬご意見、ご支援をいただいていた元大丸東京店、肥後崎英二さん(写真右上、大丸ニューオリンズ・ジャズメン、

編集長から

ジャズレコード初吹き込み100年を記念したWJFのシリーズ例会がスタート。その第1回『ラグタイムからJAS Sまで』が7月1日(土)アテネフランセにて開催され、会報95号ではその模様をレポートしています ▼第1部の冒頭で51年前の外山夫妻の結婚式で新郎新婦がラグタイムをピアノで連弾する写真が映し出され、昨年金婚式を迎えた外山夫妻が半世紀の時空を越えて再度連弾するという、ジャズレコード100年に相応しいシーンでした ▼第2部では外山恵子さんが、ニューオリンズ武者修行時代に現地で聴いたキッド・トーマスのトランプの感動を熱く語り、外山喜雄さんが実感したキッド・トーマスのトランプスタイルを再現。お2人のジャズへの強い想いが伝わってくるステージでした ▼ステージ袖には巨大なラップの蓄音機1932年英国EMG製が鎮座し、初吹き込みのジャズSP盤から流れる、会場は100年前のジャズの音に固唾を呑んで聴き入りました ▼第2回例会は8月5日(土)、第3回例会は9月30日(土)の開催です。乞うご期待。(山)